

『源氏物語』 柏木の密通事件における意識

井内 健太

一 問題の所在

『源氏物語』第二部では女三宮の六条院降嫁をきっかけに、須磨下向以降、順風満帆に榮華を極めた光源氏の世界に翳りが見え始める。太政大臣の嫡男柏木の引き起こした女三宮との密通事件は、取り分け六条院世界に大きな衝撃を与えるものであった。さらに、女三宮は出家し、柏木は懊悩の末、命を落とすという、悲劇的結末を辿る。この密通事件前後の描写では、それまで端役の一人に過ぎなかった柏木の心内描写が具に描かれるという点で、作中でも稀有な場面となっている。また、その思惟内容に関しても、自身の引き起こした密通事件に対する反省が中心を占め、その帰結として死を意識するという、これまでにない暗鬱

とした描写であった。

柏木の密通事件をめぐっては、主題の問題^①や引用の問題^②が様々に議論されてきたが、本稿では、当事者の柏木がどのように自らの犯した密通事件と向き合っているのかを考察する。すなわち、作中の描写の分析を通して、柏木の意識を炙り出すことを目指している。そもそも、第一部では、光源氏が藤壺との密通について深く反省する描写は少なく、密通自体を倫理的に罪悪として捉える、いわゆる「罪意識」を光源氏の意識に見出すことは難しい。これは、「藤壺」に関しても同様のことがいえる^③。かかる源氏や藤壺の意識のあり方について、古代人の倫理意識・宗教観全体へと一般化し、古代人の「罪意識」の希薄さの表れとして説明する論^④もあった。しかし、源氏の密通に対する意識の描か

れ方と柏木のそれとは同一視できないだろう。

柏木の意識においては、次の四つのもので繰り返し語られていることに気付く。すなわち、「光源氏に対する葛藤」、「女三宮に対する思慕の念」、「露見の恐怖」、「死の覚悟」といったものである。ここでは、それぞれの局面に着目して、柏木が自身の密通をいかに正当化し、また、いかに否定するかを捉える。そして、最後に源氏における密通についての意識の描かれ方と比較してみたい。

二 光源氏に対する意識

ここでは、物語の叙述の順序に従って、柏木の心内描写のうち、源氏に対する意識が表れた箇所を中心に見てゆくこととする。女三宮の婿選びの段階から、柏木は権勢志向の人物として登場しており、朱雀院や太政大臣の発言から、彼が皇女との結婚を通じて、栄達を実現させようと望んでいることが語られていた（若菜上④三六―三七）。しかし、そんな期待も虚しく女三宮の婿として光源氏を選ばれた後、柏木の心内が直接明かされる。

さまざまの御定めありしころほひより聞こえ寄り、院にもめざましとは思しのためはせずと聞きしを、かく異ざまになりたまへるは、いと口惜しく胸いたき心地

すれば、なほえ思ひ離れず。そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひには、なほ庄されたまひてなむ」と世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあらたらざらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。（若菜上④一三五―一三六）

朱雀院への決定を残念に思い、胸を痛める柏木は、源氏への降嫁の後もお、女三宮を諦めることができず。それは、自分も女三宮の婿候補として認められていた一人であるという自負と、光源氏には最愛の妻紫上がいて、女三宮への愛情を最大限に注いでいないという批判意識に裏打ちされていた。「かたじけなし」は、若菜上巻中、当該場面までの叙述で源氏や紫上の意識においても女三宮の身分の高さを表す語として繰り返し用いられているが、当然、柏木とて比類なく高貴な女三宮との身分の懸隔は十分に自覚するところであった。⁽⁶⁾

この後、柏木は自分の身の程への卑下意識——源氏には

敵わないという痛切な自覚——を抱えながら、女三宮への同情の念を深めるとともに、女三宮をないがしろにする光源氏への非難の意識から、徐々に行動を激化させる。

六条院の蹴鞠の遊びの日に女三宮を垣間見た瞬間では、女三宮の迂闊な振る舞いにも思い至らないほどに冷静さを失っており、自分の慕情は報われるだろう、と女三宮との間に「契り」があることを信じ込んでいる(若菜上④一四四)。しかし、その直後光源氏と直接対した途端、夢想から現実に戻されることとなる。

院は、昔物語し出でたまひて、「太政大臣の、よろづのことにたち並びて勝負の定めしたまひし中に、鞠なむえ及ばずなりにし。……」とのたまへば、うちほほ笑みて、「はかばかしき方にはぬるくはべる家の風の、さしも吹き伝へはべらむに、後の世のためことなることなくこそはべりぬべけれ」と申したまへば、……(中略)……かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき、と思ひめぐらすに、いとどこよなく御あたりはるかなるべき身のほどと思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかてたまひぬ。(若菜上④一四四―一四五)

光源氏が太政大臣の蹴鞠の技量を持ち出し、自らも及ばなかったとするのは、宴席での些細な冗談に過ぎなかったが、柏木にとっては家格の差を痛切に思い知らされる言葉であった。源氏が相手では女三宮を奪うことはできないとして、自らの「身のほど」を思い知らされ、鬱屈とした思いを抱えながら退出する。ここでは、光源氏への対抗心はすっかり削がれてしまっている。

しかし、蹴鞠の遊びからの帰路、柏木と夕霧との対話の場面では、先ほどと一転して、柏木は再び光源氏への敵愾心を露わにする(若菜上④一四五―一四六)。光源氏は女三宮そっちのけで紫上のもとに入り浸っていると、女三宮へ寄せる同情を夕霧に伝える。光源氏を花から花へと渡り歩く鶯に喩えて、多情さを痛烈に皮肉る歌を詠じるのであった。

ここでの柏木は、大義は自らのもとにあると信じてやまない。そうして、とうとう小侍従に女三宮への想いを込めた手紙を贈るも、小侍従の返書は厳しく柏木を拒絶するものであった。しかし、女三宮に直接想いを伝えたいという情念はやまず、源氏に対しても「なまゆがむ心」(若菜下④一五三)を抱くかもしれないと語られる。ところが、六条院で催された競射の場で光源氏を目にすると、「気恐ろしく

まばゆく、かかる心はあるべきものか」(若菜下④一五五)と、恐れをなしているのは、前の蹴鞠の場面の反復に近い⁷⁾。せめて女三宮の飼い猫を手に入れたいと願い、さらなる狂気へと陥っていくのであった。

やがて、柏木は小侍従の手引で女三宮の寝所に忍び込むこととなる。密通事件後、柏木の意識において、光源氏に對しては畏怖の念のみを抱き続けることとなる。

この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。(柏木④二三〇)

事後に冷静さを取り戻した柏木は悔恨の念に襲われる。光源氏に疎んじられることに恐怖と羞恥を感じるといふ。柏木の密通に対する後悔の意識は、直接には、光源氏に對して生じるのである。柏木はこの後、賀茂祭の日に「くやしきぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに」(若菜下④二三二)と独詠している。ここでの「つみ」には「罪」と「摘み」とが掛かっている和歌特有の表現となっているが、自らの犯した罪を見つめる重々しい述懐である。さらに、光源氏の姿に「神」を重ねることで、畏怖の對象として最高次の存在に押し上げられる。光源氏という「神」の神域を犯したという「罪」の意識が柏木を苛んでいる。

さらに、柏木は単に世を縦にする光源氏の権力のみを恐れるのではないことが明かされる。

年ごろ、まめ事にもあだ事にも召しまつはし、参り馴れつるものを、人よりはこまやかに思しとどめたる御氣色のあはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目をも見あはせてまつらむ、さりとて、かき絶えほのめき参らざらむも人目あやしく、かの御心にも思しあはせむことのいみじさ、などやすからず思ふに、心地もいとなやましくて、内裏へも参らず。さして重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよと、かつはわが心もいとつらくおぼゆ。(若菜下④二五八)

柏木が長年にわたる光源氏の厚情を回顧している場面である。人一倍自分に目を掛けてくれた光源氏に對して、「おほけなきもの」と恨まれてしまつては、お目通りもできないう。光源氏と柏木の親交については、後の場面で「衛門督をば、何さまのことに、ゆゑあるべきをりふしには、かならずことさらにまつはしたまひつつのたまはせあはせし」(若菜下④二七二)と、光源氏の方でも日ごろ柏木と近しくしていたことが確認されるものの、これまで

の描写では、柏木にはつきりと意識されてはいなかった。罪を犯した後に、光源氏への裏切りに思い至り、柏木は懊悩を深め、身の破滅を覚悟するのであった。

以後、光源氏を避ける柏木は参内もままならないが、朱雀院五十賀の試楽の場に呼び招かれて、やむなく光源氏と対面することとなる。光源氏は柏木に痛烈な皮肉を浴びせながら酒を飲ませようとすると、柏木は酔ったふりをしてその場をしのぐとする。なおも、光源氏に盃を進められ、さらに気分の悪くなった柏木は宴を抜け出し、後に死へと至る病の床につくこととなる。

三 女三宮に対する意識——「おほけなさ」の有無

光源氏に対しては、当初こそ叛意を含んでいたものの、柏木の意識では畏怖の念が強かった。以下では、女三宮に對しての意識を見てゆくこととする。中納言へと昇進し、帝の信任も重かった柏木は、一躍時の人となり、朱雀院の女二宮を娶るが、女三宮への思慕の念はやむことなく、逢瀬の実現を図るため、小侍従を籠絡しようとする。光源氏のもとで冷遇されている女三宮の状況を朱雀院が耳にし、女二宮の方が安心できると漏らしていると柏木は言う。小

侍従に「あなおほけな」(若菜下④二一九)、「おほけなき心」(若菜下④二二〇)とたしなめられても、柏木は訴え続ける。男女の仲には定めがないもので、女御や皇后の身分であっても、他の男と交わることが無いとも限らないという(若菜下④二二〇、二二二)言葉には、『河海抄』をはじめとする古注釈によって、在原業平と二条后との密会譚などが示唆されているとの指摘がなされている。また、柏木は女三宮が他の女たちに引けをとっている状況を繰り返し訴え、小侍従もそれについては認めざるを得なかった。

こうして、小侍従を説得し、女三宮の寝所に近づき得たが、柏木自身も密会の直前までは、女三宮への懸想は「いとけしからぬこと」(若菜下④二二三)と弁えており、想いを伝えることで、「あはれ」と感じてもらえないだろうか、と考えるだけであった。しかし、女三宮を前にするやいなや、柏木は理性を失ってしまふ。

「数ならねど、いとかうしも思しめさるべき身とは、思うたまへられずなむ。昔よりおほけなき心のはべりしを、ひたぶるに籠めてやみはべりなましかば、心の中に朽して過ぎぬべかりけるを、なかなか漏らし聞こえさせて、院にも聞こしめされにしを、こよなくもて離れてものたまはせざりけるに、頼みをかけそめはべ

りて、身の数ならぬ一際に、人より深き心ざしをむなしくなはしはべりぬることと動かしはべりにし心なむ、よろづ今はかひなきことと思うたまへ返せど、いかばかりしみはべりにけるにか、年月にそへて、口惜しくも、つらくも、むくつけくも、あはれにも、いろいろに深く思うたまへまさるにせきかねて、かくおほけなきさまを御覽せられぬるも、かつはいと思ひやりなく恥づかしければ、罪重き心もさらにはべるまし」(若菜下④三二四〜三二五)

右は女三宮に対して、長年の想いを訴える柏木の弁である。ここで、「おほけなき心」が自らに存することを認めていることが注目される。柏木は前の小侍従との会話では、「おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」(若菜下④三二〇)と、「おほけなき心」を持っていないとして、身の潔白を訴えていた。ただし、当該の「おほけなき心」が指す内容は、女三宮が降嫁する前に、婿候補の一人として求婚していたことであり、密通のことをいうのではない。「おほけなし」は、「分不相応である、だいそれている」ことを意味する語であるが、既に指摘されているように、『源氏物語』中では密通に関係して用いられることが多く、柏木については当該例を含めて一

二例(全二九例中)用いられている⁸⁾。今西祐一郎氏は「おほけなし」の語が「親密な間柄における信頼の裏切り」を指していることを指摘したが、ここでの柏木の意識には光源氏の存在は消失しており、光源氏を裏切るといった考えには至っていないため、自らの「おほけなき心」を認めようという事になった。すなわち、光源氏に対する「おほけなき」は認めないものの、女三宮に対しての「おほけなき」を抱いていることは隠さないといい体である。一度は身分の及ばぬために諦めようとした女三宮への情愛を捨て去ることができないとして、柏木は思いのたけを訴え続け、不義は犯さないことを誓う。

恐ろしさに返事もできない女三宮に対し、「世に例なきこと」(若菜下④三二五)でもないと言ひ、薄情な態度をとると、かえって無分別な心も起こしかねないと脅す。そして、かねて想像していたような気高さを持ち合わせない女三宮のやさしく愛らしい様子に「さかしく思ひしづむる心」(若菜下④三二六)を失ってしまうのだった⁹⁾。

四 露見恐怖の意識——「そら恥づかし」と「空に目つきたるやう」

密通事件を起こした後、柏木は事件が光源氏を含む周囲

に知られてしまうことを恐懼する。ここからは、そのような露見を恐れる意識の描写を見てゆく。左は、密通直後の述懐である。

さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず。女の御ためはさらにもいはず、わが心地にもいとあるまじきことといふ中にも、むくつけくおぼゆれば、思ひのままにもえ紛れ歩かず。(若菜下④二二九～二三〇)

密通を「いみじき過ち」「いとあるまじきこと」として捉える柏木の悔恨の念は強い。そして、この世に生きていることが恐ろしく、「そら恥づかしき」心地がするという。「そら恥づかし」は作中でこの一例しか見出だせない語であるが、注釈書類では「天空から見られているかのような恐怖感」とするものと、「なんとなく恐ろしい」とするものとで説が分かれている。「そら」を恐懼の対象とみるのか、単なる接頭語とみるのかの違いは大きい。増田繁夫氏は、前者の立場をとり、人間を超越する存在としての「そら」に対して恥じ入ったり、恐れ入ったりする意味を持つとして、ここで、「そら」におののく柏木に「良心の発生」を見るといふ⁽¹⁾。しかし、類似の語と見られる「そら恐ろし」につい

ては、露見恐怖の対象となる人間の存在が陰に陽に示される事が多いことを以下確認しておきたい。対象の人物・集団に二重線部を付してある。

(1) 女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆき心地して、めでたき御もてなしも何ともおぼえず、常はいとすくすくしく心づきなしと思ひあなづる伊子⁽²⁾の方のみ思ひやられて、夢にや見ゆらむとそら恐ろしくつつまし。(箒木①一〇三～一〇四)

(2) いとどあはれにかぎりなう思されて、(桐壺帝)御使などのひまなきもそら恐ろしう、ものを思すこと隙なし。(若紫①二二三)

(3) かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。(賢木②一〇五)

(4) いとかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれど、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。(賢木②一一六)

(5) 女、いかで(薫)見えたてまつらむとすらんと、空さへ恥づかしく恐ろしきに、あながちなりし人の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの人に見えたてまつらむを思ひやるなん、いみじう心憂き。(浮舟

⑥ 一四二

(6) 昔、母君、乳母などの、かやうに言ひ知らせつつ、たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心かなはず、たぐひなきいみじき目を見るはといと心憂き中にも、知らぬ人に具して、さる道の歩きをしたらんよとそら恐ろしくおほゆ。(手習⑥三三三〜三二四)

(1) は、源氏と契った空蟬の心内で、遠く伊予国に赴任している夫に思いを馳せ、夢に現れているのではないかと恐れている。(2) では、光源氏との密通によつて懷妊した藤壺が、体調を氣遣う桐壺帝の使者が頻繁に来訪することと、真実を知られてしまうことに怯える。(3) では、光源氏と密会した朧月夜が周囲の人々の視線を不安に思っている。(4) は、東宮を心配する藤壺の心内で、世間の人々に出生の秘密が漏れてしまうことを恐れて、出家を決意するのだった。(5) は、匂宮と契った後、薫を前にした浮舟の心内で、薫に悟られてしまうことを不安に思っている。(6) は、入水後に助けられた浮舟が、僧都の妹尼に初瀬詣でに出掛けることを誘われるも、同行を断る場面で、知らない者との遠出に「そら恐ろしく」感じるという。この例は、浮舟の漠然とした不安感を表しており、露見を恐れ

る事実も対象も存していないようである。

(6) を除いた全ての用例において、自らが抱え持つ秘密が露見することを恐れる対象は、人間やその集団である。また、次の例も合わせて考える必要があるだろう。

(7) (源氏)「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。……」(須磨②一七九)

右は、須磨下向前に藤壺に別れを告げる光源氏の発言の一部である。都を離れなければならなくなったことは思いがけない罰であるが、思い当たる節がわずかにあつて、「空」も恐ろしいという。ここでは、天の超越者としての「空」が自らの密通の秘密を見通しているのではないかと考える源氏の意識を表す表現となっているが、接頭語としての「そら」ではなく、「空も」となっていることで、「そら恐ろし」とは区別するべきであろう。当該場面にしても、前掲したように、「この院にそばめたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおほゆ」(④二三〇)という描写が隣接していることを考え合わせるなら、柏木の意識において恐れられているのは超越的存在というよりも、光源氏や自らの周囲の視線とすべきか。

左は、光源氏に密通が露見した後の柏木の心内描写であ

る。「空に目つきたるやうにおほえし」という表現は、「そら恥づかしき心地」と類似したものとなっているが、語法の上からも区別しておきたい。

かかることはあり経れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとつつましく、空に目つきたるやうにおほえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ、恥づかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身も凍むる心地して、言はむ方なく

おほゆ。(若菜下④二五七―二五八)

自らが女三宮に宛てた手紙が源氏の手に渡ったことを小侍従に知らされた際の柏木の心内描写である。密通の露見を予感し、「空に目つきたる」心地がしたという。『河海抄』が「天眼の事歟。隠密する事も四知とて天地人我の四はしる事也。天の照覧は第一なり」と注し、現代の注釈もこれに従う。自らの悪事を天から見透かされているかのような恐懼の意識¹⁵と捉えてよいであろう。当初、光源氏に秘密が露見することを恐れていた柏木は、いざ源氏に知られてしまつと、自らを支配する天の存在に思いを馳せるのであつた。

五 死の覚悟

柏木巻巻頭は引歌表現を重ねた長大な柏木の内省が続いており、死が意識されるようになっていく。ここでは、自らの死と向き合う中で変化した柏木の心内描写を見てゆく。そこでは、両親に先立つことが「罪重かるべきこと」(柏木④二八九)として反省されている。前の若菜下巻の巻末でも、

「人より先なるけぢめにや、とりわきて思ひ馴らひたるを、今になほかなしくしたまひて、しばしも見えぬをば苦しきものにしたまへば、心地のかく限りにおほゆるをりしも見えたてまつらざらむ、罪深くいぶせかるべし。……」(若菜下④二八三)

と、母北の方に、死ぬ前にお目にかからないのは罪が深いと訴えていた。親に先立つことは「不孝」として、仏教の罪とされているが、柏木はこれまでに自分を大切に養育してくれた親との別れを心苦しく思う。光源氏に対する裏切りを恐れていたそれまでの柏木の意識は、光源氏が中心であつたが、死の自覚以降、源氏以外の他者、自らの周辺へと対象が広がっていく。

せめてながらへば、おのづから、あるまじき名をも立

ち、我も人も安からぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、なめしと心おいたまふらんあたりにも、さりとも思しゆるいてむかし、よろづのこと、いまはのとぢめには、みな消えぬべきわざなり、また異ざまの過ちしなければ、年ごろものをりふしごとには、まつはしならひたまひにし方のあはれも出で来なん、など、つれづれに思ひつづくるも、うち返しとあぢきなし。

(柏木④二九〇)

自らが生き永らえて、密通が露見して悪評が立つと女三宮たちにも迷惑がかかるが、その前に死んでしまえば、光源氏も自分をゆるしてくれるのではないか、自らの死によって全てをご破算にしようと柏木は決意する。ここでの「我も人も」について、注釈書類では柏木自身と女三宮とを指すとされているが、すでに指摘のごとく、光源氏や家族といった周囲の人物をも含めたものと考えたい。柏木の意識の対象はすでに女三宮一人には留まっていけないのである。

「かれ聞きたまへ。何の罪とも思しよらぬに。占ひよりけむ女の靈こそ、まことにさる御執の身にそひたるならば、厭はしき身をひきかへ、やむごとくなくこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありて、さるまじき過ちを引き出でて、人の御名をも立て、身をもかへり

見ぬたぐひ、昔の世にもなくやはありけると思ひなほすに、なほけはひわづらはしう、かの御心にかかる筈を知られたてまつりて、世にながらへむこともいとまばゆくおほゆるは、げにことなる御光なるべし。深き過ちもなきに、見あはせたてまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、かの院の内にあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ」など、いと弱げに、殻のやうなるさまざま泣きみ笑ひみ語らひたまふ。(柏木④二九四―二九五)

右は、父大臣が行者と話しているのを聞いて、小侍従に語りかける柏木の弁である。自分の犯した「罪」について、父は思いも寄らないのだと言う柏木は自らの罪の重さを自覚しているようである。一方で、在原業平と二条後の伝説等を踏まえて、「昔の世」にも「さるまじき過ち」の例はあったことだし、自分の行いに「深き過ち」はなかったと言う。光源氏に自らの「咎」を知られ、直接相対してからは、生きていることができなくなつたと言う。そして、死を目前にした柏木が最終的に願うことは、光源氏に許されることであつた。密通それ自体を重い罪と捉えずに、光源氏の怒りを恐れる思考は一貫している。

さらに、柏木は親友の夕霧に対して、「事の違ひ目」(柏

木④三一六)があつたことにより、光源氏の怒りを買って以来、病が重くなつていき、生き永らえることもできなくなつたと言ひ、来世に禍根を残さぬよう、幼いころより世話になつていた光源氏の許しを得るよう説得して欲しい、と言ひ残して死んでゆくのであつた。

六 光源氏の密通に対する意識との比較

ここからは、光源氏の藤壺との密通に対する意識を確認することで、柏木の意識との差異について考察する。既に指摘されているように、光源氏が「恐ろし」の語で密通を捉えた描写は柏木の意識と比較されるものであつた。

(a) 殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども、例の、御覧じいれぬよしのみあれば、常のことながらも、つらういみじう思しほれて、内裏へも参らで二三日籠りおはすれば、また、いかなるにかと御心動かせたまふべかめるも、恐ろしうのみおぼえたまふ。(若紫①二三二)

(b) 「皇子たちあまたあれど、そこをのみなむかかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくう

つくしと思ひきこえさせたまへり。中將の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。物語などして、うち笑みたまへるがいとゆゆしうつくしきに、わが身ながらこれに似たらむは、いみじういたはしうおぼえたまふぞあながちなるや。(紅葉賀①三二九)

(c) 「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひたまひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしければ、かしこまりてまかてたまひぬ。(葵②一八一―一九)

(a) (c) はいずれも父桐壺帝に対して、密通の露見とその結果を恐れた意識である。(a) は藤壺との逢瀬が描かれた直後の場面で、自分が参内しないことを桐壺帝が心配する事を想像して、恐ろしく思っている。(b) は、冷泉誕生の後、自らの子を目にした際の光源氏の感慨である。生れてきた子が光源氏によく似ていると言ひながら、愛しむ桐壺帝の前に、「恐ろしう、かたじけなく」思う一方で、喜びや感動が入り混じっていたという。(c) は、六条御息所を軽んじる光源氏に対して、桐壺帝が訓戒する場面で、

藤壺への懸想が知られたら、と想像して恐懼している。

光源氏が桐壺帝に対して密通の罪を恐れる関係は、柏木が源氏に対して恐怖を抱く関係とパラレルであるが、桐壺帝の愛情は絶対のものとして光源氏に注がれており、光源氏自身もそのことを信じ切っている。また、光源氏の恐怖意識は一回的のものとして描かれ、深く追求されないため、読者に深刻な印象を与えることがない。

しかし、第二部以降、源氏の意識にも変化が芽生える。

「みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおぼえありさま、来し方にたぐひ少なくなむありける。されど、また、世にすぐれて悲しき目を見る方も、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人さまま後れ、残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それにかへてや、思ひしほどよりは、今までも、ながらふるならむとなむ思ひ知らるる。」(若菜下④二〇六)

右は、紫上との対話で光源氏が自らの半生を回想する弁である。自らは類まれな栄華を極めた一方で、人一倍悲しい目にもあったという。「あぢきなくさるまじきこと」には

藤壺との恋が意識されていると思われるが、それは憂愁や苦悩として受け止められていて、ここではまだ反省や罪の自覚には程遠い。

一方で、柏木の密通事件後にいたってようやく光源氏は自らの罪を悔恨の意識を持って向き合うようである。

故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。(若菜下④二五五)

右は、前掲した密通露見後の光源氏の心内描写の続きで、ここで光源氏は亡き父が自らの密通に気付いていながら、知らない振りをしていたのかもしれない、という意識に到達し、「恐ろしくあるまじき過ち」であったと痛恨する。また、前述したように、物語は柏木密通事件を通して、繰り返した「帝の妻を犯す罪」について、在原業平の伝説を踏まえながら言及することで、光源氏の密通を単に人妻・義母を犯した罪に対比される、帝の妻を犯した罪であることを再確認しているかのようであり、ここに至ってさらに光源氏の罪に対する重い追求が暗になされている。

ただし、一方で「いかばかり恋てふ山の深ければ入りと

入りぬる人のまどふらむ」(古今六帖四)の歌を引き、恋に落ちることによって理性を失い、取り返しをつかないことをしてしまふのは責められない、とする。ここには、桐壺帝への裏切りを自覚して自己の密通を罪と認める意識と、それでも情愛の流露を避けることはできなかつたとする諦念が混在している。

このことと関連して、柏木が小侍従に女三宮への思慕を訴える場面においても、以下のように述べられていた。

「まことは、さばかり世になき御ありさまを見たてまつり馴れたまへる御心に、数にもあらずあやしきなれ姿を、うちとけて御覽せられむとは、さらに思ひかけぬことなり。ただ、一言、物越しにて聞こえ知らずばかりは、何ばかりの御身のやつれにはあらん。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」(若菜下④二二)

一)

柏木は女三宮と逢おうなどという大それた考えはなく、ただ一言声をかけただけだと言う。神や仏に對してであっても、心の思いを申し伝えるのは罪にあたらないというのは、問題をすり替えた詭弁なのだが、ここで思い返されるのは光源氏の密通についての以下の述懐である。

これはいと似げなきことなり、恐ろしう罪深き方は多

うまさりけめど、いにしへのすきは、思ひやり少なき
ほどの過ちに仏神もゆるしたまひけん、思しさますも、
なほこの道はうしろやすく深き方のまさりけるかな、
と思し知られたまふ。(薄雲②四六四)

斎宮の女御との恋を不相応なこととしつつ、藤壺との恋は恐ろしく罪深いものであったが、若気の至りとして仏神も許すだろう、とかつての源氏は樂觀していた。ここでは情愛の発露を神仏も咎め立てはしないはずだという、物語の論理が見られる。

さらに、柏木の死後に女三宮が出生した薫を目にした光源氏は以下のように述懐する。

さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなめり、この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや、と思す。(柏木④二九九)

ここでは、藤壺との密通は光源氏の生涯を貫く恐懼の對象として捉えられ、不義の子薫の出生はその報いであるという。密通の報いによって死を得た柏木、出家することとなった女三宮のように、光源氏も罪の報いから逃れることはできなかつた。このような思いがけない報いを得たのであるから、来世での罪障は軽減されるだろうか、という期

待を抱く。ここに至つてようやく、かつての密通に対して、報いを受けるべきものとして捉えるようになるのであった。

七 おわりに

以上、ここまでで確認した女三宮との密通事件に対する柏木の意識についてまとめおきたい。事件以前においては、柏木の権勢志向と光源氏に対する批判感情が相まって、徐々に密通へと突き進んでいくこととなった。そこで行動

に歯止めをかけていたものは、自身の身の程についての卑下の意識が中心であったが、それでも自らは女三宮を得る資格があったのだと信じて疑わない。そして、密通以後、それまで自分に目をかけていた源氏を裏切ったという事実が付き、源氏の怒りを恐れるようになる。やがて、事件に氣付き、源氏の怒りを知った柏木は、深い懊悩に苦しむこととなるが、柏木の苦悩の中心は源氏に対する悔恨の念であった。病の悪化とともに、死を覚悟した柏木はやがて自らの両親たちに対して、申し訳なく思うのであった。

右のような密通における柏木の意識について、本稿では源氏の意識と比較するのみに留まった。主題の問題としては第一部の密通事件と第二部の柏木事件とは異質であり、

安直に因果応報の表れとみることはできないことが指摘されているけれども、柏木密通事件以降、光源氏が自身の犯した密通について振り返る場面では、源氏の密通に関する捉え方に変化が生じている。

「罪意識」に苦悩する光源氏の姿を描くことを避けていた第一部の時点から、自身の密通の罪とその報いに思い至るまでには、物語の論理の転換が必要である。光源氏の密通は、第二部以降どのように再定位されているのか、という課題が残ったので次稿を待ちたい。

※『源氏物語』の引用は小学館『新編日本古典文学全集』により、巻数、頁を記した。引用に際しては、私に表記を改めた箇所がある。

【注】

- (1) 石田穰二『源氏物語論集』（桜楓社、一九七二）所収の諸論、森一郎「女三の宮事件の主題性について——柏木との事件に関する一考察」（『源氏物語の方法』桜楓社、一九六九所収）、吉岡曠「女三宮物語の構造」（『源氏物語論』笠間書院、一九七二所収、初出は一九六三）、深沢三千男「女三宮物語の基本構造」（『源氏物語の形成』桜楓社、一九七二所収、初

出は一九六五)、伊藤博「柏木の造型をめぐる」(『源氏物語の原点』明治書院、一九八〇所収、初出は一九六七)、清水好子「源氏物語の主題と方法——若菜上・下巻について」(『清水好子論文集 第一巻 源氏物語の作風』武蔵野書院、二〇一四所収、初出は一九六九)、高橋亨「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二所収、初出は一九七三)、秋山虔「柏木の生と死」(『源氏物語の論』笠間書院、二〇一一所収、初出は一九八二)等。高田祐彦「柏木物語の主題」(『源氏物語研究集成第2巻 源氏物語の主題下』風間書房、一九九九)に細やかな整理がある。

(2) 『伊勢物語』との関連についての論が多く、野村精一「源氏物語の人間像・Ⅲ 柏木」(『源氏物語の創造』桜楓社、一九六九所収、初出は一九六四)、今井久代「柏木物語の「女」と男たち——業平幻想の解体と柏木の死」(『源氏物語構造論——作中人物の動態をめぐる』風間書房、二〇〇一所収、初出は一九九五)、室田知香「柏木物語の引用的表現とその歪み——「帝の御妻をも過つたぐひ」の像と柏木」(『日本文学』二〇〇七・一二)等。また、引歌表現について論じた前掲注(一)高橋亨論文、鈴木宏子「柏木の物語と引歌」(『古今和歌集表現論』笠間書院、二〇〇〇所収、初出は一九九二)

等。

(3) 藤壺が「つみ」の語で密通を捉えていないことを明かした、野村精一「藤壺の「つみ」について」(『源氏物語の創造』桜楓社、一九六九所収、初出は一九五八)が先駆的かつ代表的な論。また、近時では、今井上「光源氏の「罪」を問う——秘匿の意図」(秋澤互、袴田光康編「考えるシリーズ 3 源氏物語を考える——越境の時空」武蔵野書院、二〇一一)が先行研究を整理しつつ、物語の主題上の要請から光源氏の罪意識の希薄さを説明付ける。拙稿「『源氏物語』藤壺の密通における「心の鬼」」(『国語と国文学』二〇一六・八)では、「心の鬼」の語に着目して、藤壺が「罪意識」を抱く存在として描くことが避けられていることを論じた。

(4) 今西祐一郎「罪意識のかたち」(『懺悔なき人々』(『源氏物語覚書』岩波書店、一九九八所収、初出はそれぞれ一九七三、一九七四)や増田繁夫氏による一連の論考。増田繁夫「源氏物語の人々の思想・倫理」(和泉書院、二〇一〇)にまとめられている。

(5) 「(源氏)『かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらん、……』」(④四九)、「(紫上)『……かたじけなく心苦しき御事なれば、いかで心おかれたてまつらじとなむ思ふ』」(④六七)、「あはあはしきやうならんは、人のほどか

たじけなし」と(源氏八) 思すに、……」(④七二)、「紫上」
『いとかたじけなかりし御消息の後は、……』(④九一)、
以上四例。

(6) 小西甚一「苦の世界の人たち——源氏物語第二部の人物像」
〔紫式部顕彰会編『源氏物語と紫式部・研究の軌跡研究史篇』
二〇〇八、角川学芸出版所収、初出は一九六八)は、皇女
女三宮を求める柏木の高慢心を自己の身分に対する卑下意
識の裏返しとしてとらえる。

(7) 柏木の物語において、似た場面や同語の反復が多い点につ
いては、池田節子「場面と物語の反復——柏木物語の同語
反復を中心に」(『源氏物語表現論』風間書房、二〇〇〇所収、
初出は一九九八)に詳しい。

(8) 前掲注(四)今西論文、山本利達「「おほけなき心」考」(『奈
良大学紀要』一九九七・三)、細野はるみ「「おほけなき心」
の系譜——源氏物語・夕霧と柏木の物語への一視点」(『学芸
国語国文学』二〇〇〇・三)、吉村研一「光源氏と柏木の密
通における罪意識の語り分け——「おそろし」と「おほけなし」
の果たした役割」(『物語研究』二〇一一・三)

(9) 前掲注(四)今西論文。

(10) 石田穰二「女三の宮と柏木について」(『源氏物語論集』桜
楓社、一九七一所収、初出は一九五一)などが最終的に密

通事件を引き起こす原因となったのは、女三宮の幼稚さに
あつたことを指摘する。

(11) 例えば、『新編日本古典文学全集』(小学館)など。

(12) 例えば、『新潮日本古典集成』(新潮社)など。

(13) 前掲注(四)増田書。また、同氏による「源氏物語の人物
の論理・思考・行動」(『源氏物語研究集成第六卷 源氏物
語の思想』風間書房、二〇〇一)、「柏木の〈恥づかし〉(過ち)
の意識と〈良心〉」(『源氏物語の展望第八輯』三弥井書店、
二〇〇九)参照。

(14) 引用は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八)
によつた。

(15) ただし、仏語の「天眼」は説話等の用例では、仏教者が悟
りによって得る超人的な能力としての「天眼通」の意味で
用いられることが多い。『源氏物語』では「知るしめさぬに
罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるる」(薄雲②四五
〇)と「天趣の眼」で用いた例がある。拙稿「『源氏物語』
における冷泉帝の罪について」(『東京大学国文学論集』二
〇一七・三)でも論じた。

(16) 前掲注(二)の高橋論文、鈴木論文に、死の意識と結びつ
く引歌の叙述が考察される。

(17) 高木和子「物語の「世」について」(『源氏物語の思考』風

間書房、二〇〇二所収、初出は一九九四）では、繰り返される「世」と「人」の語を通して、自己を取り巻く人間関係に思いが及び、自己の人生と不可分のものとして、柏木が意識していることが説かれている。

(18) 吉村研一「光源氏と柏木の密通における罪意識の語り分け——「おそろし」と「おほけなし」の果たした役割」(『物

語研究』二〇一一・三)等。

(19) 前掲注(二) 森論文。

(付記) 本稿は、二〇一七年八月五日古代文学研究会(於東京大学)における口頭発表をもとにしている。発表の際にご教示いただいた諸先生に、厚く御礼申し上げます。

